

引手 玉子は利休形、桐は原叟好、木瓜菊大徳寺形也、いづれも煮黒み大小あり、竹にて節の所を用るは如心齋好、茶革樂燒原叟好、但し茶革青土佐は袋張に用ゆ、

〔茶傳集七〕一窓れんじの簾、夫々の廣サに切合端しを揃へ、青糸にてあみて懸被申と見へたり、乗物すだれの様にかたく見へて悪シ、古歌に有伊豫簾よし、侘は須摩簾も懸申也、

〔和泉草三〕座鋪ニ簾掛ル事

一座鋪ニ簾掛る事、夏ハ掛テ吉、自然ニ水ニテヌラシテモ用ル、冬ハ簾不好、乍去座鋪ノアカリヲ作ル時ハ、冬モ用ベシ、口傳、

〔槐記〕享保十一年二月廿八日、待合ニテノ御咄ニ、○近衛家略鹿園ニ、フスマノモチリタルハ、ドチガアクヤラ、シレヌモノニテ、客ノ心遣スルモノ也、トカクニ上ニナリタル方ハ、アカヌ筈也、ト心得ベシト仰ラル、

〔茶道早合點上〕茶室

潜口（くろぐち）に、ぎり上りともいふ、茶室へ入口なり、大サ（サ）まどのごとし、軒に喚鐘、奴鑼、木魚、客板等、あい圖の道具を釣たるもあり、

〔茶譜十四〕一利休流ニ、小座敷へ入口ヲク（ク）リト云、

右宗旦曰ク、バ（バ）リト云能名ノ有之ニ、當代之ヲ踏（ニシ）アガリト云、賤言葉ト云々、

右踏上ト云コト、古田織部時代ニ大工ノ云初シヲ、其以後之ヲ云觸テ、歷々ノ仁モ踏上ト云誤也、

〔橋庵漫筆二〕茶室の潜口をにぎり上りと云、貴賤長幼の分なく、此處より出入す、全穴居の制にもとづくもの歟、

〔南方錄三〕隣上り

潜口